

第 59 回 湘南科学史懇話会（2012 年 9 月 22 日（土）午後 2 時 30 分～6 時 00 分）

グラスゴー大学と明治日本

講師：金子 務さん（科学史、大阪府立大学名誉教授）

●講演概要

明治の科学技術政策の中心となった工部大学校（東大工学部の前身）は、スコットランド、グラスゴー大学出身の若手指導者ダイエル（ダイヤー）によって整序展開されたが、当時のグラスゴー大学で新興のエネルギー学の形成にあっていたランキン教授と W.トムソン教授が、伊藤博文らに推薦した結果である。18 世紀の同大学は国富論のアダム・スミスや潜熱発見のブラック教授、ジェームズ・ワットらが居て、18 世紀の初期産業革命の起点の一つになっていた。明治期に同大学に留学した日本人科学技術者も多い。明治以降の日本の科学技術の性格を特徴づけた大学として、お話ししたい。（講師記）

●講師プロフィール

金子 務（かねこ つとむ）：1933 年埼玉県川越市生まれ。57 年東京大学教養学部教養学科卒。読売新聞社記者、中央公論社編集者、科学雑誌『自然』編集部次長、81 年『アインシュタイン・ショック』でサントリー学芸賞受賞、85 年大阪府立大学人間文化科学研究科教授、97 年図書館情報大学教授、99 年帝京平成大学教授。現在、国際日本文化研究センター共同研究員、形の文化会会長、（財）日本科学協会理事。著書・翻訳多数。

●日時：2012 年 9 月 22 日（土）午後 2 時 30 分～6 時 00 分

●会場：藤沢産業センター（藤沢NDビル）8階 ミーティングルーム 3

〒252-0052 藤沢市藤沢 109 番地（湘南NDビル7階）

電話 0466-21-3811 JR・小田急藤沢駅（北口）徒歩 2 分

<http://www.cityfujisawa.ne.jp/center.html>

●参加費：1000円

●連絡先：猪野修治（湘南科学史懇話会代表） 〒242-0023 大和市渋谷 3-4-1

TEL/FAX 046-269-8210 email shujiino@js6.so-net.ne.jp

湘南科学史懇話会 <http://www008.upp.so-net.ne.jp/shonan/home.htm>

●第 59 回湘南科学史懇話会冒頭の御挨拶

—金子 務先生をお迎えして—

猪野修治（湘南科学史懇話会代表）

■金子 務先生は現代日本を代表する科学史家です。読売新聞記者・中央公論編集者の 25 年間のジャーナリズムと出版界へ生活を経て、アカデミズムに転身されましたが、その後、膨大な著作を刊行されるとともに、研究会（「形の文化会」会長）や講演活動、さらには各種の共同研究をなさり、多くの学問的業績を残されております。ジャーナリスト出身者らしく、先生の著作物は濃密な内容ながらも、その筆さばきは猛烈に走り続ける文章で充満しております。

■私をはじめ金子先生を知ったのは著書『アインシュタイン・ショック』上下（河出書房新社、1981年、岩波現代文庫、2005年）を通じてでした。本書はサントリー学芸賞を受賞されております。本書を読み、私は文字通り、「金子 務・ショック」を受けたことを今でも鮮明に記憶しております。本書は、第1巻の副題が「大正日本を揺るがした四十三日間」、第2巻の副題が「日本の文化と思想への衝撃」となっています。当時の世界的な天才物理学者アルベルト・アインシュタイン（1879（明治12）-1955（昭和30））が、当時の日本の科学界と思想界に大きな貢献を果たした当時の「改造社」社長の山本実彦（1885-1952）の招聘により、1922（大正12）年11月17日～12月29日までの43日間、日本を訪問し各地の大学で講演が行い、あらゆるジャンルの大正の文化人・思想家・科学者・一般人に大きな影響を与えました。金子先生ご自身、御著書で、「大正期デモクラシー期の日本人を確実に巻き込んだあの四十数日間に凝縮した祝祭の熱狂。さらに伏流となって戦後の昭和現代史への隠然たる刻印を捺していく長期にわたる影響」と書いておられます（第2巻、あとがき、314-315頁）。それに同行したのが、わが石原純（1881-1947）でした（配布資料：西尾成子『科学ジャーナリズムの先駆者 評伝石原純』（2011年9月28日）拙書評参照）。

■さらに先生の御著書に感動したのは『オルデンバーグ—十七世紀科学・情報革命の演出者』（中公叢書、2005年）であります。ドイツ生まれで「人と人を結びつける天才」のオルデンバーグ（1615-77）の科学者同士を結び付けた功績は計り知れない。編集者御出身の金子先生にとっては「15年越しの積年の想い」であったろうと推察します。懇話会を主宰する私自身、大変に参考にもなり大きな励みとなりました。（配布資料：拙書評「科学革命の大立役者」参照）

■湘南科学史懇話会で先生に講演をお願いするのは今回で三回目です。第一回目は、第17回（2001年9月30日）「星はなぜ星★形か—ダヴィデの星と清明判紋」（神奈川女性センター）です。この内容は「象徴図形としての星形多角形—星表現を中心に」として『湘南科学史懇話会通信』第8号（2002年9月22日発行）に掲載しました。第2回目は、第48回（2006年8月6日）「古代ローマ世界帝国の興隆と没落」（藤沢産業センター）においてであります。この内容は『湘南科学史懇話会通信』第14号（2007年8月31日）に掲載しました。前者の講演は面白い後日談がありますが、文章で書くと誤解を招きかねないので口頭でお話をします。後者の講演は、藤沢市在住の作家・思想家の故いだも先生（1926-2011）

の大著『〈主体〉の世界遍歴』全Ⅲ巻（藤原書店、2005年11月30日）をめぐる連続講演（全4回）の第4回目に、鎌倉市在住の作家・精神科医のなだいなだ先生と一緒に登壇していただきました。特に、科学史家の金子先生が、この大著をどう読まれるのかお聞きしたい、と強く思いました、講演をお願いしたかったです。つまり、『アインシュタイン・ショック』が私にそうさせたのです。なお、『通信』第8号、14号とも数部、受付においてありますので、手に取ってみてください。

■そのために、大変に恐縮なことに、あの大著にぜひとも金子先生に目をとおしていただきたく、ぶしつけにも全Ⅲ巻を、自腹で購入し、金子先生にお送りしました。いいだも先生と、金子 務先生は、ほとんど接点がなく交わらないようにも見えます。一方が日本の代表的な革命思想家、一方が学術的な科学史家。しかし、私はお二人の知的探究は、どこかで交差すると直感し、スリリングな対論的な講演が出来ないであろうか、と想い至りました。ほかでもない、私がそう思ったのは、金子先生が、あの『アインシュタイン・ショック』で描かれた多様な人物と時代の形相が、脳裏から離れなかったからであります。そうでもなければ、いまは、この世にはおられない、いいだ先生と金子先生の直接的な対論的な講演は実現しなかったものと思います。これは私がほぼ1年をかけて、全記録から完全再現した思い出深い報告集です。「『通信』第14号」。

■この数年は日本の科学史上の人物に焦点を当てられ、必ず現地に足を運ばれ、多数の日本科学史の著作を刊行されています。これらについては長くなるので省略します。詳細は下記のHPをご覧ください。ですから、今回は三回目の講演となります。「グラスゴー大学と明治日本」と題して講演をしていただきます。講演概要は案内資料を参照ください。今年（2012年）の春、スコットランドのグラスゴーとイングランドのバーミンガムに足を運ばれ、現地調査を行ったとお聞きしております。では金子先生、どうぞ、よろしくお願ひします。

http://ts-kaneko.net/?page_id=2

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%91%E5%AD%90%E5%8B%99>

<http://tskaneko.exblog.jp>